The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	成功はいかに語られるか : 西ティモールの出稼ぎ農民による廃品回収業
Author(s)	森田, 良成
Citation	年報人間科学. 2008, 29-1, p. 57-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3670
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

成功はいかに語られるか

―西ティモールの出稼ぎ農民による廃品回収業

森田　良成

〈要旨〉

本稿では、自給度の高い農村の経済と、資本主義の原理にもとづく市場経済とが出会うところで生じるコンフリクトに焦点をあてる。

東インドネシア、ティモール島の西端にクパンという都市が位置する。クパンの東には、政府によって低開発が問題として長く指摘され続けている、丘陵農村地帯が広がっている。農民たちは現金収入を求めてクパンに出稼ぎにやってくる。廃品回収業に従事するアナ・ボトルは、そうした農民たちの姿の一つである。廃品回収の仕事はたしかに重労働であるが、アナ・ボトルたちはしばしば物見遊山に出かけているかのような態度でそれに臨む。各自の廃品の回収量は、個人の技術や努力というよりは、基本的には偶然に委ねられている。そんなアナ・ボトルたちの中にあって、突出した稼ぎを安定的にたたき出しつづけ、もっとも裕福な生活を実現している一人の成功者がいる。

本稿の目的は、市場経済に遅ればせながら参入する農民たちについて、資本主義に搾取される者、あるいは柔軟に適応していく者として評価することではない。都市における一人の農民の成功が、いかにして成し遂げられたものだと彼らの間で説明されるのか。さまざまな説明がなされていることを記述し、分析する。この作業を通じて、農民が市場経済に適応していくとはそもそもどういうことであるのかを問い直す。

キーワード

出稼ぎ、市場経済、自治経済、廃品回収、アトニ・メト

1. はじめに

本稿では、自給度の高い農村における経済と、資本主義の原理に基づいた市場経済とが出会うところで生じるコンフリクトに焦点をあてる。

農民が市場経済に遅ればせながら参入する。しかし彼らがそれまでの生活の中で培ってきた行動や思考の理は、「労働の希少性」や「生産性」といった市場経済の前提とされる理からずれている。そのために、さまざまな摩擦や軋轢が生じる。ブルデューはこの齟齬を、「ハビトゥスと経済構造との間の不一致」（ブルデュー一九九三：一五）として分析した。

ここでは、東インドネシア、ティモール島の西端に位置する都市クパンにおいて、丘陵農村地帯から出稼ぎに来る農民たち、中でも「アナ・ボトル」（ボトルの子）と呼ばれる廃品回収人たちの事例を見ていく。

一地方都市にすぎないクパンの町から排出される廃品の量は限られたものである。それに対し、そこで働くアナ・ボトルの人数はあまりに多い。農民たちは廃品という限られたパイの取り分を、偶然のゲームに委ねることによって分け合う。彼らは仕事の効率性を優先していない。各自の仕事の成果を偶然に委ね、都市と農村の二つの経済を頻繁に移動することによって、市場経済におけるさまざまな問題に直面することをともかくも回避することに成功している（森田　二〇〇七）。

だが、仕事の成果の大部分を偶然に委ねているアナ・ボトルにおいても、廃品の回収量、および廃品回収と兼ねて彼らが行う玩具の行商の売上げにはしばしば明らかな個人差が生じる。ではこの個人差を、彼らはどのように語り、理解するのか。本稿では一人のアナ・ボトルの成功の物語を手がかりにして、農民たちの中で、農村とは異なる都市世界における成功がいかに説明されるのかを考察する。

2. 農民と市場経済

市場経済の原理は世界を覆いつくしていくかのように見えるが、この過程は経済の単なる一元化ではない。このことはかねてより指摘されてきた。

たとえばウォーラーステインは、資本主義というシステムは、もともと一貫した経済合理性だけで成り立っているものではなく、その影響が及ぶ範囲にあるすべての経済を資本主義化する必要などまったくないのだと述べている。資本主義は、その合理性が通用しない部分をその版図に含んでいてこそ円滑に機能することができ、現在に至るまで繁栄することができた。市場経済の原理がほぼ完全に開花しきったならば、システムは逆に崩壊へ向かうことになるのである（ウォーラーステイン　一九八五：一六二頁）。

ウォーラーステインによれば、周辺世界を世界経済に組み込もうとした植民地諸国の政策は、人々を土地から引き剥がしてプロレタリアート化し、完全に市場経済に適応させるというよりも、「半プロレタリア世帯の出現を促進することをめざしていた」(ウォーラーステイン 一九八五:四二-四七頁)。なぜなら半プロレタリア化した農民の世帯は、市場経済における労働がもたらす賃金が最低水準以下であっても、もう片方の自給経済で補うことで何とか生活を成り立たせてしまえるからだ。こうして植民地権力は、人びとに対してより厳しい搾取を継続的に行うことが可能になるのである。

一方でハリスは、農民たちの「柔軟性とダイナミズム」について述べている。市場経済に片方の軸をおく農民たちは、たとえ政治的・経済的には主流世界に従属しているとしても、「土地と労働の管理において一定の独立性を保ち続けることができる」。このために彼らは、外からのさまざまな圧力に対して大きな程度の柔軟性とダイナミズムを発揮できる。よって半プロレタリア化した農民たちは、周辺におかれ困難な状況にある集団の中でも、自分たちの手で食料を生産しない人々と比べてはるかにたやすく自分たちを支えることができるという(HARRIS 2005:424)。

市場経済と農民の自給経済とのコンフリクトをこのように俯瞰的に見るならば、市場経済に遅ればせながら参入してきた農民たちの姿は、厳しく搾取されているともとれるし、柔軟に適応しているともとれる。議論は、世界システムに包摂された周辺世界を、資本主義に常に道を明け渡すだけの「受動的周辺」とみなすか、それとも「主体性」を発揮し生活を自ら改変させて適応していく人々とみなすかという問題へと展開する。しかし分析者の立場からは、彼らについて短絡的に受動性を強調することも、また安易に主体性を主張することもまずは避けなければならない(風間 二〇〇三:二六六-二六八頁)[1]。論者が明確な政治的立場を選ばないかぎり、こうした議論を先へ進める手立てはない。

本稿においては、当事者である彼らが世界をどのように認識しているのかに注目する。以下では、農民たちが市場経済における自らの行為をその語りの中でいかに位置づけるのかを見ていく。市場経済が基本的な前提として個人に求める態度とは、獲得した富を再投資してさらに増やしていくことである。市場経済に適応し、そこで富を獲得するために、農民たちはこの態度を身につけなければならない。しかしそれは、モースの考察を引きながらバタイユが述べた、「喪失という栄誉がもたらす効果」(バタイユ 二〇〇三:八八-八九頁)に大きな意味を見出してきた人びとの態度とは相容れないものである。

バタイユのいう喪失を、ブルデューのいう浪費に置き換えてみる。ブルデューは「浪費が、浪費にみえるのは、外部の異質な原理、たとえば、最大収益の原理に準拠しているからにすぎない」と浪費という価値判断の恣意性について断ったうえで、「時間の浪費や富の浪費は、おそらく、社会の存続の条件であり、逆に、倹約することになったら、その社会は存続を放棄することになるだろう」としている(ブルデュー 一九九三:三八)。本来的に相容れないはずの「資

本主義のハビトゥス」を農民たちが身に付けたときには、彼らが生きてきた世界そのものがまったく別のものに変わってしまっているのだ。

ブルデューのこの指摘を踏まえたうえで、中川の議論（中川　一九九九）を見てみよう。フローレス島エンデの村から、国境を越えて出稼ぎに行った者たちが、世界規模の資本主義の世界での生活を経たのち、稼ぎ出した富とともに再び村に帰ってきた。しかし彼らは、意外なことに村の従来の経済や世界観に何ら変化をもたらさなかった。村人たちはあいわらず、婚資や親族関係、焼畑、妖術師の話を縁側や宴会の席で繰り広げる。出稼ぎ人たちが現金を市場経済という未知なる舞台で稼いできたという事実は、一見矛盾していて調停が不可能であるようなエンデの伝統的な知識体系の中に、すっぽりと組み込まれてしまうのだ。エンデの村では、男たちのほとんどが出稼ぎに出かけるという変化がたしかに起こっている一方で、ブルデューがいうような「社会の存続の放棄」はまったく起こっていないのである。

そもそも村人たちが市場経済に適応するとはどういうことをさして言えることなのかを、まず考えなければならない。われわれが時に安易に市場経済への適応と言い表してしまう現象は、いったいどのようにして起こるのか。適応できたという何らかの状態を仮に想定できたとして、ではそこへ至る過程とはどのようなものなのか。そこには受動的に搾取される者もいれば、主体的に飛び込んでいく者もいるかもしれない。同一個人がさまざまな価値の間で揺れ動くかもしれない。

本稿で試みるのは、こうした過程の一例を具体的に描くことである。たとえばコロンビアの農民たちは、市場経済において彼らの関心をもっとも強く惹きつけ、しかし正体のつかめない貨幣の増殖という現象を目の当たりして、それを生命の成長・繁殖に置き換えてとらえようとした。市場経済において彼らが大きな富を得る方法として導き出した答えとは、「貨幣に洗礼を受けさせる」といういまわしい秘密であった（TAUSSIG 1980:126-139）。子どもの代わりに洗礼を受けたペソ札が、利子を引き連れて持ち主の元に帰って来るというのである。

市場経済の理、特に増殖を続ける貨幣の力を目の当たりにしたとき、人々はどのようにそれを理解するのか。貨幣が貨幣を生むという市場経済の理をどのようにとらえるかが、農民たちにとって大きな問題となる。われわれは利潤について、資本そのものに内在的な特徴として当たり前のようにみなしている。しかしながら、農民はこれを自然な状態においてはありえないこととみなし、子どもの犠牲を伴うような非道徳的な説明にも時にたどり着くのである。

本稿は、農民が市場経済に適応していくとはどういうことであるのかを理解していくための試論である。以下では、西ティモールの町に出稼ぎに出ている農民たちが、彼らの間でもっとも多くを稼ぎ、もっとも裕福である一人の突出した成功者のケースについていかに説明するのかを見ていく。

3．クパンのアナ・ボトル

3-1．クパンにおける廃品回収の歴史と仕組み

クパンは、インドネシアの東部、東ヌサ・トゥンガラ州（NTT州）の州都であり、ティモール島の西端に位置している。人口は約二十五万人だが、東インドネシアという民族的に多様な地域の州都であることを反映し、都市の規模に比して複雑な民族構成を特徴とする。西ティモールに広く分布するメト（アトニ・メト）のほか、島外からの移住者が多い。

メトたちが住むクパンの東に広がる丘陵地帯の農村については、低開発、貧困の問題が指摘されて久しい。現金収入を求める農民たちは、しばしばクパンでの出稼ぎ労働に従事する。彼ら安くて膨大な労働力は、都市の下層労働を一手に引き受け、都市の経済を下支えしている。

廃品回収に従事するアナ・ボトルたちは、十代前半から四十代までの幅広い年齢層にわたる男性たちである。彼らは基本的にみな、南中央ティモール県のオインラシと呼ばれる地方における近接したいくつかの集落から来ている。両親あるいは妻子を村に残し、町でジャワ人の親方のもとで働き、現金収入を得ている。

クパンにおける廃品回収ビジネスは、七十年代の終わりごろ、カンプン・ソロールという地区で始まった。住民の八割近くがキリスト教徒であるクパンにおいて、カンプン・ソロールは、ジャワ人などのイスラム教徒が住民の九割を占める区域である。住人には、公務員や会社勤めの者のほか、食事や軽食をつくって屋台などで売る小規模の自営業者が多い。このためこの地区では、家の軒先に停められた屋台の多さが目につく。

カンプン・ソロールのそばのバスターミナルで夜の賑わいを演出するのは、こうしたジャワ人たちが営むたくさんの屋台である。かつてクパンの夜は早い時間に静まり返ってしまい、退屈で、「外でちょっとした食事を済ますことさえ難しかった」という。ジャワ人が誇らしげに語るところでは、それが「今では、クパンもだいぶにぎやかになった。それはジャワ人がたくさん来たから」ということだ。

クパンに廃品回収ビジネスを持ち込んだのも、ジャワ人の一人の男性であった。扱う廃品は当初は空き瓶だけだったが、現在では、鉄、アルミニウム、銅といった古金属から、古バッテリー、プラスティックまで多様化している。一時期は家畜の骨も回収していたが、回収して積み上げておくと悪臭を放つという問題があり、長くは続かなかったらしい。

回収された空き瓶の一部は、酒や調味料など内容物自体は製造できても、自社製の瓶を製造することはできない小規模な地場産業において流用される。それ以外の空き瓶と、古金属、古バッテリーは、コンテナによる海運でスラバヤのディーラーに送られる。様々なプラスティック製の容器やそれらの破片は、廃品回収の親方を経由して、専門に扱う業者の元に集められる。プラスティックはここで色

別に分別されて細かく砕かれ、洗浄と乾燥を経てから、やはりスラバヤへ送られていく。

クパンにおける廃品回収業の特徴は、アナ・ボトルという出稼ぎ農民の労働力をふんだんに使っていることである。彼らはそれぞれの荷車を押して、町じゅうを細い路地にいたるまでくまなく巡り歩く。金属部品を材料別に分けるのも彼らの手作業である。小さなモーターの内部の銅線も、外装を砕いて取り除いて集める。プラスティックを手作業で洗うのも、アナ・ボトルたちとは別の出身地域のやはり出稼ぎの者たちである。

廃品回収ビジネスの誕生当初、アナ・ボトルたちは空き瓶と交換するために風船を持ち歩いていた。現在では風船だけにとどまらず、彼らは荷車に五百ルピアの安物から三万五千ルピア[2]といった高額商品まで大小さまざまな玩具を吊るしている。これらの玩具は廃品との交換ではなく、行商のための商品である。現在のアナ・ボトルは、廃品回収と行商を兼ねて町を流すのである。彼らの廃品回収による収入は、廃品でいくら荷車をいっぱいにしようと、単価が高価なアルミニウムを大量に得るのでもない限り、儲けがきわめて薄い。よってアナ・ボトルたちは、廃品回収よりも玩具の行商をしばしば重視する。大量の玩具を荷車に吊るす者たちにとっての廃品回収の作業は、副収入の確保という重要な意味を持つが、町で寝床と荷車を彼らに与え、資金を貸し付けてくれる親方に対して果たすべき義務としての意味合いが強くなってくる。

3-2. 物見遊山気分の労働

アナ・ボトルたちの仕事ぶりには、狩猟採集民についてサーリンズが指摘したものと似たような傾向が見られる。サーリンズによると狩猟採集民たちの仕事ぶりは、期待される成果がきわめて不安定であるにもかかわらず、深刻な不安や緊張に満ちたものとはがぎらない。むしろ彼らの仕事は、労働とも気ままなレクリエーションともつかず、労働と余暇の間を行き来しているうちにやがて日が暮れてしまうといったぐあいで行われる（サーリンズ　一九八四:七二頁）。彼らの漂泊は、あたかもテームズ河にピクニックにゆくかのような物見遊山気分でなされるのだ（サーリンズ　一九八四:四二頁）。

アナ・ボトルの労働は、まぎれもなく重労働である。廃品を満載したかなりの重量になる荷車を押して、厳しい日差しの中を、時に都市住民の冷ややかな目線にもさらされながら歩き続ける。だが同時にサーリンズが言うような物見遊山のような雰囲気も、彼らの態度にはしばしば見受けられる。

朝、それぞれの荷車を押してカンプン・ソロールを発ったアナ・ボトルは、行商用の商品を仕入れる店がある通りまで移動する。行商をしていない者も含め、カンプン・ソロールとその周辺にある複数の親方に所属するアナ・ボトルたちが、ここに毎朝集まる。行商をする者は、玩具を仕入れ、荷車の側面に取り付けた簡易な木組みにそれらを吊るしながら、また行商をしていない者は、遠くまで出

かけて行くために流しのトラックを待ちながら、仲間とふざけあったり、雑談に興じたり、タバコをくゆらせたり、嗜好品のビンロウを噛んだりして長い時間を過ごす。

この通りから、三人の少年がようやくそれぞれの荷車を押して仕事に発つ。うち一人の荷車には、前日にどこかで拾った発泡スチロールの大きな塊が積んである。少し歩くとバスターミナルに出る。ターミナルは海岸に面していて、階段がそのまま水面まで続いている。三人は荷車を止めると、服を脱ぎすてる。そして階段から海に飛び込む。発泡スチロールは格好の浮き輪代わりになる。ひとしきり泳ぐと陸に上がり、服を着る。濡れた体と下着は、歩いているうちに自然に乾くに任せる。

もう少し年長の若者たちだと、仕事に出た先での昼下がりに数人で酒を買って飲む。何本かを空にしてようやく重い腰をあげても、荷車を押す足取りがしばらくはおぼつかない。そんな姿をやはり酔っている別の者がからかい、笑い声を上げる。道脇で横になってしまい、そのまま数時間眠ってしまう者がいたりする。

遠方まで向かうトラックの上では、荷台に縦にして並べた荷車の上で、若者や少年たちが声をあわせて流行歌を歌う。道路沿いの木々の枝が張り出していてぶつかりそうになるのを、身をかがめてよけるスリルに興じる。目的地についたときは、もう昼になっている。仕事の用意も何もなく、最初からまさに物見遊山の目的でついてきた者が一団の中に一人くらいまぎれていたりする。

物見遊山の雰囲気は、このように特に若者と子供たちにおいて目立つ。年配者たちは、彼らのこうした仕事ぶりに対して「遊びに行っているだけじゃないか」と冷ややかである。ただここまで目立った行動は見られないものの、大人たちにしてもだいたいの方向を決めてあとは足の向くまま歩くというのが基本的な仕事の態度であり、時にはやはりささやかな酒宴に興じたりしている。

カンプン・ソロールの住人や町の人々は、町で見かけるこうしたアナ・ボトルの姿に対して、貧しい生活にとどまる出稼ぎの農民たちへの同情の声をあげるよりは、「彼らは店の手伝いなどの仕事で一つの場所にじっとしているより、ああやってぶらぶらしながら働くのがすきな、つまりは怠け者なのだ」といった評価をしている。

4. 成功の解釈

以上に見てきたように、アナ・ボトルたちは、しばしば物見遊山に出かけているかのような態度で仕事を進める。そんな彼らの中に、きわだって優れた稼ぎをたたき出し続けている男がいる。仕事の成果をほとんど偶然にまかせてしまっているようなアナ・ボトルたちにあって、彼の成功はいかにして可能になったのか。

4-1. 成功者の姿

朝の通りでのアナ・ボトルたちのにぎわいもだいぶおさまったころ、その男がひときわ大きな荷車を押して悠々と姿を現す。もともとサイズが少し大きい荷車が、前面と両サイドに吊るした大量の玩

具で覆われている。仕入れ先の店の前に荷車を停めると、男はおだやかな笑みをうかべつつ店内へと入っていく。彼が、アナ・ボトルの成功者サバスである。四十代の男で、妻と二人の子供を村に残し、クパンと村を行き来しながら生活している。

アナ・ボトルたちは行商について、「商品を多く吊るすほど稼げる」と言っている。何人かの親方の元に分かれて働いているアナ・ボトルだが、商品の仕入先は、彼らが毎朝集まるこの通りの向かい合った二軒の店に限られている。売れ筋の商品は誰もがすぐに売り歩くようになるので、他の者を出しぬくことはむずかしい。自分が少しでも売り上げを伸ばしたければ、まずは品揃えを増やすことである。商品の欠品によるロスを防ぎ、また荷車の見栄えもよくなって声をかけられやすくなるということだ。

ただし誰もが簡単に品揃えを増やせるわけではない。当然ながら、仕入れのための資金が問題となる。親方からの信用があれば、まとまった額を借りることができる。一日の売り上げを無駄遣いせずに再投資していけば、商品の量をじょじょに増やしていける。だがこうしたステップを順調に登っていける者は多くない。稼いだ金は村への仕送りに使われるし、大きな出費を要する村での大切な儀礼が重なることもある。それに若者たちは遊びたいざかりである。こうして、たとえいったんは品揃えを増やせたとしても、再投資のサイクルを維持することができずに、じりじりとあるいはごくわずかな期間で商品を減らしてしまう。「今日がだめならば、明日は稼げる。毎日いつもうまくいくなんてことがあるだろうか？」というのが、アナ・ボトルたちが仕事に臨む基本的な姿勢である。

こうした中で、ほとんど常に十分な量の廃品を回収し、行商からも最大限の稼ぎを安定して得ているのがサバスなのだ。彼が一日に手にする利益は十万ルピア前後となる。他のほとんどの者は、一日に三万から五万ルピア手に入れれば十分に満足するだろう。行商をせずに一日にやっと一万ルピアを稼ぐような者と比較するなら、サバスはまさに桁違いの額を稼いでいる[3]。

サバスはもともと他のアナ・ボトルたちと同じくオインラシの集落の出身であるが、結婚を機に妻の故郷であるアマラシの村への移住を選んだ[4]。クパンからオインラシまでは、バスで下手をすると十時間以上かかってしまう。だがアマラシまでなら二時間程度しかかからず、交通費も半額以下で済む。アマラシの村には平地が広がっており、かつては広い範囲に点在していた家々も、車が通ることのできる直線道路沿いに集められている。これは西ティモールにおける農村整備後の村の典型的な景色である[5]。一方オインラシの村では、もともと土地の起伏が激しいこともあり、道路から離れた斜面に家々が分散したままの古い集落の形式を残している。

屋根こそ葉で葺いているサバスの家だが、その床は、たいていの家が土間であるのに対し、滑らかなコンクリート製である。裏にある主に煮炊きに使われる小屋の壁には、きれいに磨かれた鍋がいくつか光っている。アマラシの村では、一定の費用を払いさえすれば、道路沿いに張られた電線から電力を引き入れて利用することができ、サバスの家でも夜には電灯が灯る。客間では、十四インチの

テレビ、VCDプレイヤー、大型のスピーカーが鎮座している。クパンだけでなくマレーシアなどへの出稼ぎに行く者もいるアマラシの村でも、テレビとVCDプレイヤーを持つ家庭はまだ限られている。一方オインラシの村では電力事業は進んでいない。ガソリンを使った発電機を使用している家が二軒あるのみである。

サバスは抜きん出た自らの稼ぎについて、次のように語った。

見てみな。お前はもう知っているだろう?俺は毎朝、他のアナ[・ボトル]よりもずいぶん遅い時間に仕事に出発する。それでいて、いつだって廃品を手に入れてくる。荷車が空っぽのまま帰ってきたことなんて一度だってない。確実に荷車をいっぱいにして帰ってくるのだ。

俺が道を行くときに、人は廃品を持って出てくる。朝から何人ものアナが、その家の前を通ったはずさ。しかし他の誰でもなく、この俺に、「空き瓶があるよ」と声がかかるのだ。他の連中は、オエサパ、オエサオ、テノウなんかに出かけて行く。チャンプロンに行く者だっている(6)。俺にはそんな遠くまで行く必要はない。町の中だけなのさ。町の中で、廃品を「見つけに行く」のではなく、ただ「取りに行く」のさ。

サバスはどのようにして現在の豊かな生活を築くことができたのか。なぜより多くの金を稼げるのか。以下では、サバスの成功が人々の間でどのように説明されるのかを見ていく。

4-2. 成功はいかに語られるか

サバスの成功について、以下の四つの説明が聞かれる。

まず一つ目は、サバスという個人が才能や気質において他のアナ・ボトルよりも優れているというものである。こうした説明は、主に廃品回収の親方によってなされる。

サバスは能力と勤勉さを親方から認められており、「彼は頭が切れる。ジャワ語だってできる」と評価されている。一方、他のアナ・ボトルたちについては、「怠け者で、少し貯めただけの金をすぐに酒を飲んで使ってしまう」という評価が下されている。

サバス自身も、ジャワ人の存在に好ましさを感じている。クパンにおいてジャワ人は、ストリート・ベンダーとして優れた技能を発揮している点で一目置かれた存在である。サバスは仕事中にジャワ人の物売りに出会うと、唐突にジャワ語で話しかけてみたりする。道で「ジャワ人に間違えられた」ことを誇らしげに語ったこともあった。

カンプン・ソロールで親方の母親が経営するキオスクでは、米や砂糖の小分け、皿洗いといった細かい仕事があり、それをアナ・ボトルに手伝わせる。サバスはこうした手伝いをよくこなしている。手伝いの褒美としてタバコをもっていくように言われても、他の者とちがって受け取らない。

すでにテレビとVCDプレイヤーを所有しているサバスは、今度

はテレビ番組を受信したいと考えている。親方が以前使っていた古い型のパラボラアンテナを、適当な値段で譲り受ける話が進んでいる。町で買ったチェーンソーの調子がおかしいことを、親方に相談したりもする。親方との会話にこうした話題がのぼることは、他のアナ・ボトルではありえない。

いったん村に帰ると、一‐二週間くらいを過ごしてからクパンに戻ってくる。クパンに到着したその日の午後には、早速仕事に出ていく。他の者たちが仕事を休む日曜日にも、彼は教会から戻り、着替えを済ませてしまうと仕事に出かけていく。カンプン・ソロール周辺のアナ・ボトルで、クパンに滞在中も教会へ通う者は、サバスの他にはもう一人いるだけである。数人で連れ立って酒を飲みにいく一団に、サバスが加わることはない。町にいる間は、嗜好品であるビンロウを噛むことも、口の中が赤くなってみっともないからと避けている。

親方はサバスを「彼は違う」、「彼は優れている」と評価している。サバスが抜きん出た成績を上げることができるのは、その勤勉さや優れた経済感覚のためである。

二つ目は、サバスの成功は呪術の使用によるという説明である。これを私に語ったのは、カンプン・ソロールから少し離れた別の親方のもとで働く、十代半ばの少年カニスである。彼は若いが、周りの大人たちとくらべてもより多くの商品を荷車に吊るし、より多くを稼いでいる。

「サバスはオバット（obat）を使うのがうまいから」というのが、カニスの説明である。「オバット」という語は、なんらかの不思議な効力を発揮する物や技術を広く指す[7]。サバスがオバットを発動させるために具体的にどういう手続きを踏んだのかを、カニスは問題にしていない。オバットはその気になれば誰にでも、自身では術について知らなくても知識に長けた者に依頼することで使用できる手段である。オバットのたしかな効力についても、やはり誰もが認めている。この理屈にしたがえば、カニス自身もオバットを駆使すればサバスのように廃品を多く集め、多くの商品を売り上げることが可能になる。しかしカニスはオバットを使わない。なぜならそれはキリスト教徒として忌むべき行為であるからだ。

アナ・ボトルたちはみなキリスト教徒である。オインラシの村において、それまでの在来の信仰からキリスト教への本格的な改宗が進んだのは一九六七年ごろだといわれている。「かつては木や石をあがめていたんだが、今は昔とは違い、闇から外に出てキリストを信仰しているのだ」といったわれわれが教科書で習うような「アニミズム」と「啓蒙」の説明が、しばしば村人たちの口から語られる[8]。

キリスト教はそれまでの信仰を否定した。しかし必ずしもオバットの力そのものを否定したのではなかった。村人たちはオバットを荒唐無稽なものとして見限ったのではなく、その使用が道義的に間違っているという理由で否定したのである。オバットは、現在に至るまでその不思議な力を秘めつづけている。村人の不審な死の原因

として、何者かによるオバットの使用が疑われることもある。

「オバットを使ってまで金を儲けることはない。今日はあまり儲からないというのが神の考えならば、それでいいじゃないか。毎日儲けようと思わなくってもいいじゃないか。俺たちは、神とともに生きていくのか、それともオバットとともに生きていくのか？」

カニスはサバスの成功を、禁じられた呪術に頼ったいまわしい行いの結果だとしている。

三つ目に挙げるのは、サバスの成功自体をそもそも認めないという立場である。

サバスと同年代で、同じ親方の元で働くジョニは、サバスの稼ぎを「たいしたことはない」と軽んじてみせる。彼の言葉の端々には、サバスに対するライバル意識のようなものがにじむ。仕事中のあるとき、ジョニは住宅密集地の中のせまい路地を抜けながら言った。

「あいつの荷車では、こんなふうにせまい道を入っていけないだろう？方向を変えることすらできないじゃないか」

細くて勾配もかなりきついが、その代わり高台にある住宅地から海岸沿いの幹線道路へと一気に抜けることができる近道を降りる際も、ジョニは同じようなことを言った。サバスの荷車は、廃品を積んでいない状態でも荷車の自重と大量の商品とでかなりの重量があるので、この坂をジョニのように安全に下りきることはたしかにまったく不可能である。

サバスが使用している荷車のこうした弱点を挙げて、ジョニはサバスには満足な仕事ができないはずだという。サバスの行商による稼ぎは、いくら大量の玩具を吊るしているとはいえ、実際にはジョニ自身とはほとんど変らないか、日によっては彼を下回っていると語る。

そもそもアナ・ボトル各自の稼ぎは、互いに明らかにわかる形では示されてはいない。行商の各自の売り上げについては、店での仕入れの際に誰がどれだけ買うかを見ていれば、そのだいたいを推測できるかもしれない。しかし、みなが仕入れに殺到する朝の店内は混み合うし、前夜のうちに買い物をすませてしまう者もいるので、よほどの注意を払うか親しい者どうしでそういう会話をしない限り、他人の稼ぎを把握することはできない。

廃品回収による稼ぎも同じである。各自の一日の成果は、実際に仕事帰りの姿を見かけたり、計量するその場に居合わせたりしないかぎり、他の者にはわからない。それぞれの回収量は、親方が手元のノートに記録している。この記録は後で見返すためというよりも、値段の異なる廃品のそれぞれの量から合計金額を出すための計算用紙といったふぜいで使われている。ノートにはその日の仕事から早く帰ってきた者から順に記されていくので、それぞれの稼ぎは順不同で雑然と記されており、それを見たところで全体像はなかなかつかめない。つまり、各自の成果はだいたい似たようなものだという漠然とした感覚を生じやすい状況であるといえる。

サバスの廃品回収による稼ぎについて、前述のカニスは次のようにも語った。たしかにサバスは、ほとんどいつも荷車に廃品を満載

して帰ってくる。しかしそれは、彼に言わせればサバスが「無意味な買取り方をしているから」である。彼が仕事中に道でサバスといっしょになったとき、サバスが「親方が自分たちから買い取るときと同じ値段で、空き瓶を買い取っていた」姿を見たという。「いったいなんであんなことをしているのかわからない。親方に褒められたいってことなのか？」つまり、サバスが廃品を満載して帰ってくるのは事実だが、しかしそれは実はなんの利益にもなっていない。

先に挙げた呪術による説明は、サバスがより多くを稼いでいることは認めたうえで、その原因があしきものであるという理由で断罪していた。こちらの説明においては、サバスは彼の仕事の成果そのものを否定されている。

四つ目の説明は、サバス本人によって私に語られたものである。

私はあるときサバスに、「なぜ、いつもたくさんの廃品を手に入れることができるのか。他の者たちとどこが違うのか」と尋ねた。昼過ぎに成果をあっさり諦めて戻ってくるのではなく、日が暮れるまでとにかく町を流し続ける勤勉さや、その日歩くルートの選択や時間帯の計算、得意先の確保の仕方といった、廃品回収をうまく行うための技術やいくつかの注意点について語ってもらおうというのが私の質問の意図だった。

だがサバスの回答は次のようなものだった。

俺は毎週日曜日、教会に行く。そして毎日三度、朝の四時と仕事に出る前、そして寝る前にお祈りをするんだ。人は神に祈らなくてはいけない。神を常に慕い、神と一つであらねばならないんだ。

もちろん、ただ祈ってばかりではだめだ。じっと祈るばかりで、いったいどこから金が得られる？俺が言いたいのは、神に祈ることもせずに、ただやみくもに働くだけではだめだということなんだ。たとえば道が二つに分かれているとしよう。神への祈りを怠っていたら、こっちの道を選んでしまう。しかしその道に廃品はないんだ。だが、いつも祈っていれば、心の中で神と一つであれば、もう片方の道へと自然と足が向かう。そして廃品を手に入れることができる。こういうことなのだ。

この仕事を始めてから一年間は、俺だって廃品をぜんぜん集められなかったんだ。荷車は空だった。だがある日の明け方、俺はそこで寝ていて、神の姿を見たんだ。

神はおっしゃった。毎日、祈れと。目を覚まして俺は、すぐに祈ったさ。その日のことだ。そこのホテルまで行ったら、もう荷車が空き瓶で一杯になってしまった。それですぐに戻ってきて、いったん荷を下ろしてからもう一度仕事に出たんだ。するとどうだ。ちょっとそこまで行ったら、また荷車は一杯になってしまった。

それから俺は、毎日欠かさず祈るようになった。「神なんてどこにいるんだ」って人は問うことがあるが、神はいらっしゃ

る。心の中にいらっしゃるのだ。

サバス本人によって語られた四つ目の説明で注目したいのは、アナ・ボトルの中で町の市場経済にもっともうまく適応している彼が、経験を通して身についていく何らかの普遍的な知識や技術ではなく、神秘的な出来事を経験した彼という個人の特別性に基づいて成功の物語を語ったということである。

4-3. 抜きん出る力

以上で、成功者サバスについての異なる四つの説明を提示した。サバスがアナ・ボトルたちの間でどのような存在であるのかを、以下では二つの点から考察しよう。

一つめは、サバスが神秘的な突然の出来事を成功の契機としている一方、農民の経済とは明らかに異なる市場経済の理を語ることである。彼は先に挙げた神秘的な出来事についての説明の後で、次のように語った。

> 俺は、考えているんだ。俺だっていつか体が持たなくなる。重い荷車を押して町を回るこの仕事は、いつまでもやっていけるものではない。じゃあ仕事をやめたあとで、家に座わりながらにして金が入ってくるようにするには一体どうすればいいか。もうすでに、チェーンソーを買ってあるんだ。これを村で人に貸すことで、金が入ってくる（建材などを得るために木を切り倒すのに使われる）。金が貯まったら、次は製粉機（椰子の果肉を料理に使うために細かく砕く機械）を買おうと思っている。家に製粉機があれば、近所の人が椰子を持ってやってくるだろう。一キロあたり三百五十ルピアくらいの料金を取れるとして、三キロで千ルピアだ。こうすれば、毎日いくらかでも金が入ってくる。その金で電気代を払っていけるだろう。

サバスは老後について考え、「家に座りながらにして金が入ってくる方法」に思いをめぐらせている。町の生活とは異なり、食糧を自分たちで生産する村のふだんの生活において、数千ルピアの現金収入が毎日見込めることは額面以上の大きな意味を持っている。また、「座りながらにして金が入ってくる」というのは、アナ・ボトルたちの間で公務員や会社勤めの者について語るときにしばしば用いられる言い回しである。畑を耕したり、廃品回収や行商といった肉体労働をしたりして、その日にかいた「汗によって」食べ物や金が得られる自分たち農民とは違い、公務員たちは「ただ机に座って書類に名前でも書いてさえいれば」、月々に十分すぎるほどの給料を手に入れてしまう人びとである。

サバスの説明は、彼の家に椰子の実を持ってくる人がじっさいにどれだけいるかという現実性はさておき、資本の蓄積、再投資、利益の回収という一連の流れに沿った長期的な計画を描いている。他のアナ・ボトルたちに、利益の再投資という行為がまったく見られないわけではない。限られた資本で行商を始めたばかりの者は、食

費だけを残して前日の稼ぎすべてを新たな玩具の仕入れに使う。そうすることで「すこしずつ商品を増やしていく」ことを目指すのだが、往々にして挫折してしまう。ある村人は、彼らが都市の下層で働くしかないことについて、「元手がないことが問題なのだ」「俺たち村人には、ただ元手がないのだ。元手さえあれば、俺たちにだってジャワ人やブギス人のような金儲けができるというのに」と語った。彼らはどこかから元手となる資金が突然降ってくるのでもない限り、ジャワ人やブギス人といった都市での商業に長けた者たちに近づき対抗する術を想像しえないのである。

アナ・ボトルたちは富を蓄積し増やす方法として、貨幣を家畜に換えることをしばしば挙げる。「少しまとまった金ができたとする。まずニワトリを買おう。ニワトリにエサをやって大きく育てる。そうして育てたニワトリ数羽を、子ブタと交換しよう。子ブタにエサをやって育てる。ブタが大きくなったのを、今度は子牛と交換しよう。子牛にエサをやって育てる。牛が大きく育ったらもう大した金額になっている。」貨幣は家畜に置き換えられ、家畜という生命が成長することによってその価値は増殖するのである。

こうして見ると、サバスの描いたモデルがアナ・ボトルたちの中でいかに異質なものであるかがよくわかる。富をいかに増やすか、それを何に使うか、安定した収入源をいかにして築くか。彼の示したモデルは市場経済の理に則っているのだ。

サバスの語りが持つ特徴の二点目は、サバスの成功の一回性、個別性である。つまり彼の成功があくまで彼個人にとっての経験であり、一般性を獲得しにくく、他のアナ・ボトルたちが参照すべき成功のモデルとはなりにくいことである。

もしサバスが、経験を通して身に付けた何らかの具体的な技術、あるいは親方が言うような勤勉さや能力をもって成功の物語とした場合、成果が実際に上がるかはともかく、周りのアナ・ボトルも彼にならい第二の成功を目指すことができただろう。しかし彼の成功は、ある日の神との奇跡的な邂逅によってもたらされたサバス個人の一回きりのものなのである。

そもそもアナ・ボトルの中で、廃品回収とともに行商をかねて歩くことを初めてやった者がサバスであった。かつてまだアナ・ボトルたちが、空き瓶との交換のために風船をもち歩くだけだったころである。サバスはふだん風船を仕入れている店やそのそばの店で売られるようになっていた玩具を買い、荷車に吊るした。それは廃品と交換するためのものではなく、最初から行商を目的とした完全な商品としてであった。サバスが編み出したこの新しい技術は、またたく間に他のアナ・ボトルたちに広がり、追随者を次々に生んでいった。現在では、元手さえあればアナ・ボトルたちの誰もが玩具を荷車に吊るす。わずかな元手しか持たない十歳そこそこの少年までもが、ほんの五‐六個の安物の玩具を荷車の脇に吊るすほどだ。

サバスの成功の鍵がこのような具体的な技術であれば、周りの者も追随のしようがあるだろう。しかし成功は、ある日の神との邂逅によって彼だけにもたらされた。「町の中だけだ。町の中で、廃品を『見つけに行く』のではなく、ただ『取りに行く』のさ」と教え

られ、それが「神を見た」ことに由来すると教えられたところで、いったい誰がその後に続くことができるだろうか。

5．語られたこと、語られなかったこと

5-1．成功者の孤独

市場経済に遅ればせながら参入してきた大勢の農民たちの中から、特定の者が成功者として抜きん出ていく力とは、いったいなにか。ここまで成功者サバスにまつわる四つの異なる説明を見た。

アナ・ボトルたちの中で、サバスは一人だけ突出している。彼が他を突き放しているというだけではなく、他のアナ・ボトルたちも彼の背を追おうとはしていない。

その理由としては、一つには、サバスの成功についていくつかの説明が並存したまま絞り込まれていないということが考えられる。この点については、アナ・ボトルたち西ティモール農民にひろく見られる一つの傾向を指摘することができる。彼らは、他人の事柄に不用意に干渉してしまうこと、自分の立場に不相応なことを口にすることを、差し出がましい行為として忌避することが多い。門外漢が的外れな質問や意見を差し挟むことは、きわめて恥ずべき行為なのである[9]。上で述べたようなカニスやジョニによる説明は、多くの者が集まる場所で公然と述べられたのではもちろんない。サバスの成功についての四つの説明が、突き合わされたり検証されたりする機会はないのである。

二つ目には、四つの説明のどれもが、他の者がそれに倣うことができるような一般的なモデルを提供してくれないということである。それぞれの説明は、実際に行動に移すことが可能な事柄についてほとんど何も言っていない。彼らはオバットの活用へと突き進むことはできない。それは教会の教えに逆らって闇の時代へと立ち戻ることを意味している。神に会うという体験はあくまで奇跡であって、個人の努力や技術で操ることはできない。稼いだ金で聖書を買うだとか、クパンに滞在中にも教会へ通うとかいう者は出てこない。サバスの成功自体を否認している者はもちろん何の行動も起こさない。親方に対して勤勉な態度をアピールしようという者もいないし、「酒をやめる」と言い出す者もいない。

結局のところ、サバスの成功の事例は、アナ・ボトルたちが採用しうる四つの説明の間で宙に浮いたままなのである。サバスの成功例は、ある個人の特別な経験として、なぞに包まれたままなのだ。

5-2．細部へと向かう労働

サバスのふだんの生活で、周りのアナ・ボトルたちにも一目瞭然である特徴的な行動がある。それは行商の支度における、彼のじつに手の込んだ作業である。

アナ・ボトルの半分以上がとっくに仕事に出かけていった朝の通りで、サバスは駐車してある自動車のボンネットにハサミやホチキスといった道具を広げ、いつもの作業に取り掛かる。

まず、台紙に糊付けされたブリスターパックに五体横に並んで入っ

ている「パワーレンジャー」のフィギュアを、一体ずつ台紙ごとハサミで切り離す。ブリスターが浮いてしまった部分はホチキスで入念に留め直す。こうして五枚に分かれたそれぞれの台紙の上部中央にビニールや厚紙で当てをして、ホチキスで留めると、そこに穴を開ける。五枚を重ね合わせてこの穴から紐を通して束ね、荷車に吊るすのである。この商品はこれで、荷車の周囲の限られた陳列スペースにおいて、元の状態にくらべて五分の一しか場所を取らずに済み、そのぶん他の商品をより多く吊るせるようになる。サバスの荷車に吊るされた商品は、こうした作業の積み重ねによって高い密度を誇ることになる。作業に一区切りがつくと、サバスは少し離れたところからわが荷車をいとおしげに眺める。どこかにまだ商品を吊るせる余地がないかをチェックするのだ。店での仕入れも一回であっさりと済ますことはない。荷車と店を行き来して、誰よりも多い買物を三‐四回に分けて済ます。「ああ、仕事がありすぎる」と実に満足げな表情で私に言う。

日曜日に教会から戻ってくると、彼はシャツを脱いで座り込んで、木の台の上に道具をひろげると、風船をハサミで切り刻み始める。できた小さなゴムの輪を鎖状にいくつもつなげる。荷車の側面には、商品をひっかけるための釘の列が打ち込まれている。一メートルほどになったゴムの鎖を、この釘の頭に絡めながら渡す。釘にかけた小さな商品が上から抜けてしまうのを抑えるためだ。アナ・ボトルたちの扱う商品は、台紙や袋に荷車に吊るすための穴が開けられている。他のアナ・ボトルならば、古釘やタバコの火で穴を開け、そこに紐を通して荷車の木枠に結ぶかあるいは直接釘にかけるところだ。しかしサバスは違う。台紙や袋の穴の周囲には小さな厚紙やビニールを畳んだもので必ず当てがしてあり、補強がなされている。移動中に振動で穴が広がっていき、せっかくの商品を落としてしまったり、むざむざと万引きの被害に遭ったりするのを防ぐのである。「ああ、やることが多い。」と彼はぼやいてから、日曜日だというのに仕事に出て行く。周りでは他のアナ・ボトルたちが、トランプに興じたり、くつろいだ姿勢でおしゃべりをしたりしている。

サバスはその荷車に、既に限界に近い量の商品を吊るしてしまった。どれだけ多くの資本を準備できても、今以上に商品を増やすことはもはや物理的に不可能だ。一日に荷車を押して歩ける距離にも限界がある。アナ・ボトルとして彼ができることは、既に臨界に達している。彼の労力と時間は、ひたすらその内側へ、荷車の細部へと捧げられるのだ。周りのアナ・ボトルがその目でたしかに見ることができるのは、サバスが仕事中にどういう態度で町の人々と接しているのか、玩具をいくらまでなら値引きするのかではない。大量の空き瓶を一挙に得ようとしてホテルの食堂にも堂々と入っていく姿でもない。細部へとひたすら向けられる、サバスのこの手の込んだ作業である。

サバスが「忙しい、仕事がいっぱいある」とどこか誇らしげに言いながら行うこれらの作業を、真似ようとする者はいない。それが確実な収入を得るために必要な作業だとは、誰も考えていない。彼が手間と時間をかけて行うおびただしい作業は、他のアナ・ボトル

たちにしてみればほとんど無意味な作業でしかないのだ。つまりもっとも成功した男サバスは、彼らの中でもっとも膨大な時間と労力を浪費している者なのである。

6．おわりに

西ティモール、クパンにおけるアナ・ボトルの成功の物語を見てきた。

サバスという個人による一見したところ見事な市場経済への適応について、さまざまな立場からの説明がなされている。成功はサバスという特定の個人にだけに訪れている。それが聖なる力によるものか邪悪な力によるものなのか、誰にもわからないし、わかったからといって何ができるわけでもない。それを成功と見ない者すらいる。

ただ実際にサバスは、人一倍重たい荷車を押して、廃品を満載して今夜も帰ってくる。そしていつの間にかそういうことになっているのだが、ほとんどのアナ・ボトルが屋外に積み上げた瓶の上や荷車の脇などで眠るのに対して、サバスはキオスクの奥にある、アナ・ボトルの中で彼だけが所有している自室へ入っていく。電球の灯りをともし、携帯電話の充電をセットし、廃品として買い取ったのを修理して使っているコンロで湯をわかして、コーヒーを入れるのだ。

【註】

（1）この問題については、（森田　二〇〇八）において整理した。

（2）一ルピアは約〇・〇一円（二〇〇七年十月現在）。参考までに、市内のミニバスの料金はひと乗り千から二千ルピア、庶民的な食堂での一食は四千ルピア前後である。

（3）ただしサバスはふつう、三週間ほどクパンで働くといったん村に帰る。村で一ヶ月ほど過ごし、またクパンに帰ってくるというペースをとっている。

（4）メトの婚姻制度と儀礼の詳細については、（McWILLIAM　2002:159-186, 192-98, 258-78）などを参照のこと。結婚後は夫方に居住することが多いが、妻方・夫方のどちらを選ぶかは、婚資の支払い状況にかかわるほか、生活の利便性を優先してしばしば柔軟に決められる（McWILLIAM　2002:162）。

（5）西ティモールのメトの集落は、もとは防御を目的として外部からの接近が難しい場所に築かれていた。西ティモールにおいて行政・開発活動の円滑化を図って行われた農村整備事業については、（ORMELING 1956:226-232, McWILLIAM　2002 :29-30, 215-220）を参照。

（6）オエサパ、オエサオ、テノウ、チャンプロンとも地名。このうちクパンから最も遠いチャンプロンは、クパンから四六キロメートルの地点にあり、移動には往復ともトラックを利用する。トラックの運転手には往復でだいたい二万七千から三万ルピアとかなりの額を支払う。一番近いオエサパは、クパンの都市部のちょうど東の外縁に位置する。小道に入ったり出たりしながら幹線道路を徒歩でゆき、正午すぎに折り返して、同じようにしてカンプン・ソロールまで帰ってくる。

（7）オバットという語は、インドネシア語の一般的な用法として単に「医薬品」のことも指す。メトの呪術については、（MIDDLEKOOP 1960）を参照。

（8）NTT州におけるキリスト教伝播の歴史については、（FOX　1980）

に簡潔にまとめられている。また、この時期にキリスト教への改宗が進んだことの背景には、インドネシアで猛威を振るった共産党員虐殺事件の影響がある。ティモールにおける殺戮は一九六七年にも続いており、この時期に、公認された宗教の信者ではないことが無神論者すなわち共産党員とみなされてしまうという恐れから、クリスチャンになる者が増えた（FARRAM 2002:39-46）。

（9）メトの人びとの間では、謙遜が美徳として強く意識されている（McWILLIAM 2002:209）。あるとき私が道で、オエサパまでのバイクタクシーの料金の相場を尋ねたことがあった。男は、「それは自分にはわからないので教えられない。よくわからないのにいいかげんなことを教えて、後であなたにうそつきだと思われたら困る」と、満ちたりた表情で答えた。明らかに外国人だとわかる私に対しておおよその金額を教えることよりも、彼はわからないことはわからないと率直に認める謙虚さを示すことに、より重きを置いていたようだった。

【参考文献】

〈日本語〉

バタイユ、ジョルジュ　二〇〇三［一九七六］『呪われた部分　有用性の限界』中山元訳、ちくま学芸文庫。

ブルデュー、ピエール　一九九三［一九七七］『資本主義のハビトゥス―アルジェリアの矛盾』原山哲訳、藤原書店。

風間計博　二〇〇三　『窮乏の民族誌―中部太平洋・キリバス南部環礁の社会生活』、大学教育出版。

森田良成　二〇〇七　「周辺世界における農民と廃品回収業―東インドネシア、西ティモールの事例」、『トランスナショナリティ研究』大阪大学二十一世紀COEプログラム、「インターフェイスの人文学」研究報告書二〇〇四-二〇〇六 第三巻、二九五-三〇七。

森田良成　二〇〇八　「貧乏―『カネがない』とはどういうことか」、春日直樹編『人類学で世界をみる』、ミネルヴァ書房（印刷中）。

中川敏　一九九九　「学校者と出稼ぎ者―エンデの遠近両用眼鏡」『国立民族学博物館研究報告』二三(三)-六三五 - 六五八頁。

サーリンズ、マーシャル　一九八四［一九七二］『石器時代の経済学』山内昶訳、法政大学出版局。

ウォーラーステイン、イマニュエル　一九八五［一九八三］『史的システムとしての資本主義』川北稔訳、岩波書店。

〈英語〉

FARRAM, Steven 2002 Revoluiton, Religion and magic: The PKI in West Timor, 1924-1966, *Bijdragen tot de Taal-, land- en Volkenkunde.* 158[1]: 21-48.

FOX, James J. 1980 "The 'movement of the spirit' in the Timor area: Christian traditions and ethnic identities" In: *Indonesia: Australian perspectives. Indonesia: the making of a culture.* James J. Fox (ed.), Australian National University Research School of Pacific Studies: 235-246.

Harris, Mark 2005 "Peasants," James G. Carrier ed., *A Handbook of Economic Anthropology,* Edward Elgar: 423-438.

TAUSSIG, Michael T. 1980 *"The Devil and Commodity Fetishism in South America"* The University of North Carolina Press.

McWILLIAM, Andrew 2002 *Path of origin, gates of life: A study of place and precedence in southwest Timor,* KITLV Press.

MIDDLEKOOP, Pieter 1960 *Curse, retribution, enmity as data in natural religion, especially in Timor, confronted with scripture.* Amsterdam: Jacob van Campen.

ORMELING, F. J. 1956 *The Timor Problem.* Djakarta-Groningen: J.B. Wolters.

The Narratives of Success: an Analysis of Migrant Waste Collectors in West Timor

Yoshinari MORITA

This paper focuses on the conflict which emerges when a subsistence economy of an agricultural village meets urban economy built on the principles of capitalism.

On the westernmost tip of the Timor Islands of East Indonesia there is a town of Kupang. East of the town lie the vast downs - an area, which has long been perceived by the government as underdeveloped. The peasants of the area come to Kupang, seeking cash income. Some of them become the "Ana Botol" - children of the bottle - and engage in waste recycling. The work is surely strenuous, but Ana Botol more than often treat it as a mere pleasure jaunt. The success or failure is generally believed to be decided by chance. The income of the most is meager, but one of them has managed to consistently earn considerable sums of money everyday and live a life much more affluent than any others.

This paper does not attempt to evaluate the peasants, who try to catch up with the rest of the world and find their place within the market economy - it does not seek to depict them as an exploited class, nor as supple masters of adaptation. The question it asks is how they themselves envisage the actual process, by which one of them managed to succeed in the city. The author will give an account of the numerous explanations, given from the both standpoints - that of the market economy and that of the traditional one - and try to analyze them. Finally, he will try to reformulate what we call and what we should call the process of adjustment of peasants to market economy.

Key Words : migrant worker, market economy, subsistence economy, waste collector, Atoni Meto